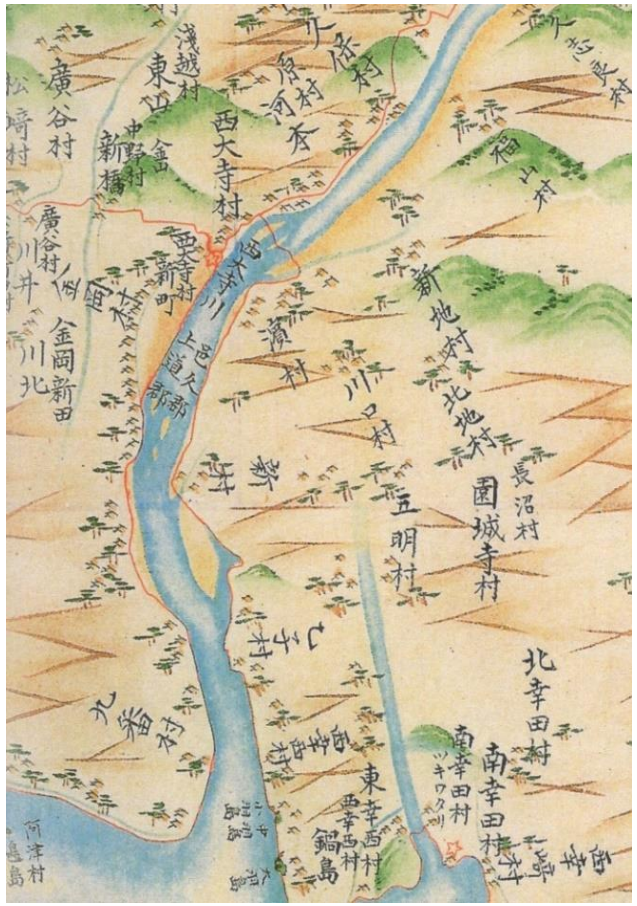
西大寺を二度訪れた伊能忠敬
Part1　伊能忠敬の生涯

202１年11月28日
西大寺愛郷会
藤井　英幸



伊能忠敬と西大寺について

伊能忠敬と西大寺の繋がりについては、西大寺愛郷会の元副会長であった青江文次氏が当会発行書籍に次の記事を遺しています。

西大寺第11号(昭和61年2月発行)に「伊能忠敬－西大寺での仕事－」右上

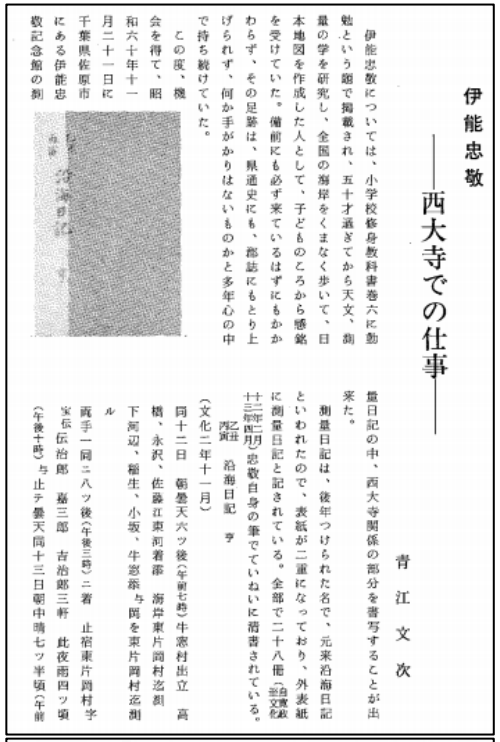
西大寺物語(平成12年3月発行)に「“推歩先生“海岸を測量」右下

青江氏は千葉県佐原市にある伊能忠敬記念館に赴き、測量日記(沿海日記とも)の西大寺関係部分を書写して記事にしたと記されています。このご苦労、ご努力に敬意を表します。

共に、伊能忠敬**第五次測量**時のことを述べています。この記事を基に調査を進めていたところ、伊能忠敬測量隊は西大寺を二度訪れていたということが判りました。

以下に、伊能忠敬の足跡について述べてみたいと思います。

その前に、伊能忠敬はどんな人だったのかから話を進めます。



伊能忠敬

——西大寺での仕事——

青江文次

伊能忠敬については、小学校修身教科書巻六に勤勉という題で掲載され、五十才過ぎてから天文、測量の学を研究し、全国の海岸をくまなく歩いて、日本地図を作成した人として、子どものころから感銘を受けていた。備前にも必ず来ているはずにもかかわらず、その足跡は、県通史にも、郷誌にもとり上げられず、何か手がかりはないものかと多年心の中で持ち続けていた。

この度、機会を得て、昭和六十年十一月二十一日に千葉県佐原市にある伊能忠敬記念館の測量日記の中、西大寺関係の部分を書写することが出来た。

測量日記は、後年つけられた名で、元来沿海日記といわれたので、表紙が二重になっており、外表紙に測量日記と記されている。全部で二十八冊（自文政元年十三年西月）忠敬自身の筆でていねいに清書されている。

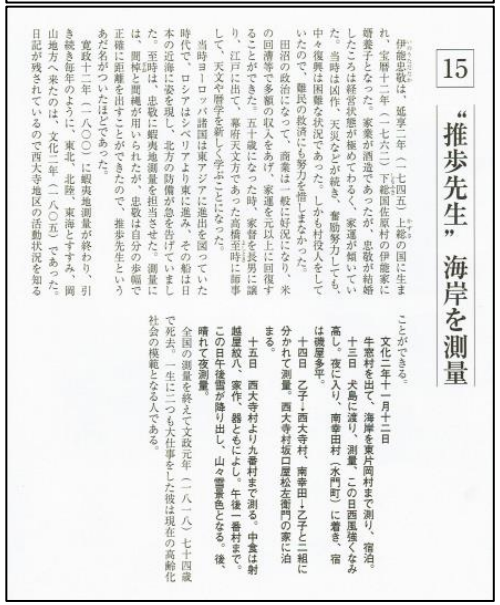
（文化二年十一月）

乙丑　沿海日記　亨

同十二日　朝曇天六ツ後（午前七時）牛窓村出立　高橋、永沢、佐藤江東荊着郡　海岸東片岡村迄測ル

下河辺、稲生、小坂、牛窓泰与岡を東片岡村迄測ル

両手一同ニ八ツ後（午後三時）ニ着　止宿東片岡村　字宝伝治郎　嘉三郎　吉治郎三軒　此夜雨四ツ頃（午後十時）与止テ曇天同十三日朝中鳴七ツ半頃（午前



15

“推歩先生”海岸を測量

伊能忠敬は、延享二年（一七四五）上総の国に生まれ、宝暦十二年（一七六二）下総国佐原村の伊能家に婿養子となった。家業が酒造であったが、忠敬が結婚したころは経営状態が極めてわるく、家運が傾いていた。当時は凶作、天災などが続き、奮励努力しても、中々復興は困難な状況であった。しかも村役人をしていたので、難民の救済にも努力を惜しまなかった。

田沼の政治になって、商業は一般に好況になり、米の回漕等で多額の収入をあげ、家運を元以上に回復することができた。五十歳になった時、家督を長男に譲り、江戸に出て、幕府天文方であった高橋至時に師事して、天文や暦学を新しく学ぶことになった。

当時ヨーロッパ諸国は東アジアに進出を図っていた時代で、ロシアはシベリアより東に進み、その船は日本の近海に姿を現し、北方の防備が急を告げていました。至時は、忠敬に蝦夷地測量を担当させた。測量には、間棹と間縄が用いられたが、忠敬は自分の歩幅で正確に距離を出すことができたので、推歩先生というあだ名がついたほどであった。

寛政十二年（一八〇〇）に蝦夷地測量が終わり、引き続き毎年のように、東北、北陸、東海とすみ、岡山地方へ来たのは、文化二年（一八〇五）であった。日記が残されているので西大寺地区の活動状況を知ることができる。

文化二年十一月十二日

牛窓村を出て、海岸を東片岡村まで測り、宿泊。

十三日　犬島に渡り、測量。この日西風強くなみ高し。夜に入り、南幸田村（水門町）に着き、宿は機屋多年。

十四日　乙子・西大寺村、南幸田・乙子と二組に分かれて測量。西大寺村坂口屋松左衛門の家に泊まる。

十五日　西大寺村より九蕃村まで測る。中食は射越屋殺八、家作、器ともによし。午後一蕃村まで。この日午後雪が降り出し、山々雪景色となる。後、晴れて夜測量。

全国の測量を終えて文政元年（一八一八）七十四歳で死去。一生に二つも大仕事をした彼は現在の高齢化社会の模範となる人である。

伊能忠敬ってどんな人？

延享(えんきょう)2年1月11日（1745年2月11日） – 文化15年4月13日（1818年5月17日））は、江戸時代の商人、天文学者・地理学者・測量家である。通称は三郎右衛門、勘解由（かげゆ）。字は子斉（しせい）、号は東河（とうが）。
寛政12年（1800年）56歳から文化13年（1816年）まで、17年をかけて日本全国を測量して文政4年（1821年）に『大日本沿海輿地全図』を完成させ、国土の正確な姿を明らかにしました。
今年が『大日本沿海輿地全図』完成、200年に当たります。

伊能忠敬の年表（1）

和暦	西暦	歳	内容
延享2年	1745年	0	2月11日上総国山辺郡小関村の名主・五郎左衛門家で生まれる。
宝暦元年	1751年	6	母（ミネ）が亡くなり、婿養子だった父は実家の武射郡小堤村の神保家に戻る。
宝暦5年	1755年	10	実家の神保家に戻っていた父の元に引き取られる。
宝暦12年	1762年	18	下総国香取郡佐原村の酒造業を営む伊能家に婿養子に入る。妻はミチ。
明和6年	1769年	24	佐原の祭礼で紛争
安永元年	1772年	27	佐原村河岸一件が起こる
安永7年	1778年	33	ミチと松島へ旅行に行き、『奥州紀行』を記す
天明元年	1781年	36	佐原村本宿組名主となる。
天明3年	1783年	38	天明の大飢饉では、私財をなげうって地域の窮民を救済する。　苗字帯刀を許される。
天明4年	1784年	39	ミチ死去。本宿組名主をやめ村方後見となる
寛政2年	1791年	45	内縁の妻、妙諦死去、仙台藩医桑原隆朝の娘ノブ（信）を妻とする。
寛政3年	1790年	46	家訓書を書く
寛政5年	1793年	48	関西へ旅行し『旅行記』を記す
寛政6年	1794年	49	家督を長男景敬に譲り、隠居し勘解由と名乗る
寛政7年	1795年	51	信死去。江戸深川黒江町に住み、幕府天文方高橋至時の弟子となって暦学天文を学ぶ。
寛政10年	1798年	53	エイ（栄）を内縁の妻とする。
享和元年	1801年	56	天明年間の窮民救済の功績により、幕府勘定奉行から苗字帯刀を許可される。

小関三治郎の誕生

- 延享2年1月11日（1745年2月11日）　、上総国山辺郡小関村で生まれる。幼名を三治郎という。
- 今年2021年は伊能忠敬生誕２７６年になる。
- 世は徳川九代将軍　家重(いえしげ)の時代
- 70年前の延宝3(1675)年に英国グリニッチ天文台が設置。
- 延享元年(1744)に神田天文台が設置。
- 母は、旧家小関家、いわゆるイワシ漁の網元の総領娘(みね)であり、父の利左衛門貞恒は武射(むさ)郡小堤(おんずみ)村神保家の酒造家の次男で小関家に入婿として入夫していた人。
- 同年に鬼平・長谷川平蔵(1745年-1795年)が誕生。
- 6歳の時に母が亡くなると、家督は母の弟が継ぎ、婿養子だった父は、兄と姉を連れて実家の小堤村の神保家の実家に追い返された。末っ子の三治郎は祖父母の下に残った。
- 小堤村神保家小関家に残された三治郎は、浜辺の納屋の番人など、下男同様の扱いを受け、苦労したという。

小関の生家の碑と銅像

神保三治郎から伊能忠敬へ（1）

- 10歳のとき、神保家の父に引き取られたが、父が居候の身であり、肩身の狭い思いをした。
- 分家し、しばらくして塾を開いたた父より、読み書きを教えられ、12歳のとき、寺で和算を、16歳で医師のもとで医術を学んだという。
- 三治郎が生まれる前の寛保2年（1742年）、下総国香取郡佐原村（現・香取市佐原）にある酒造家の伊能三郎右衛門家（以下、伊能家と）では、当主の長由（ながよし）が、妻・タミと1歳の娘・ミチを残して亡くなった。長由の死後、伊能家は長由の兄が面倒を見ていたが、その兄も翌年亡くなった。そのため伊能家は親戚の手で家業を営むことになった。
- ミチが14歳になったとき、伊能家の跡取りとなるような婿をもらったが、その婿も数年後に亡くなった。そのためミチは、再び跡取りを見つけなければならなくなった。
- 平山藤右衛門(タミの兄)は土地改良工事の現場監督としていい仕事ぶりを発揮した三治郎を伊能家の跡取りにと薦め、親族もこれを了解した。
- 17歳のとき、平山藤右衛門の養子になった形で、あらためて佐原村の伊能家へ婿入りすることになる。その際、大学頭(だいがくのかみ)の林鳳谷から、忠敬という名をもらった。
- 婿入り先の相手は21歳で前夫との間に一人の子供がいる伊能達(みち)だった。

神保三治郎から伊能忠敬へ（2）

- 宝暦12年（1762年）12月8日に忠敬とミチは婚礼を行い、忠敬は正式に伊能家を継いだ。このとき忠敬は満17歳、ミチは21歳で、前の夫との間に残した3歳の男子が1人いた。忠敬ははじめ通称を**源六**と名乗ったが、のちに**三郎右衛門**と改め、**伊能三郎右衛門忠敬**とした。
- 天明3年(1783年)11月、38歳のとき、忠敬は大利根治水の功績によって、領主の津田氏より苗字、帯刀を許される。
- 寛政2年(1790年)、忠敬は篠(忠敬の娘)の死後、星学への志を実践するため、45歳で隠居を決意し、地頭所に隠居願を出してもすぐには許可されなかった。
- 寛政7年(1795年)、50歳のとき、地頭所に隠居願を出し、今度は、許可された。
- 忠敬は、高橋至時の弟子になるため、江戸深川黒江町に居を構える。

江戸時代、商家では婿養子が多かった

江戸時代は養子が多かった。

- 磯田道史『武士の家計簿』に、「**江戸時代は、武家にかぎらず養子のさかんな社会であった。しかも、婿養子が多い。婿養子はすこぶる日本的な制度である。**中国や朝鮮には婿養子は少ない。「祖霊は男系子孫の供物しかうけつけない」とする厳密な儒教社会からみれば、日本の婿養子制度はおよそ考えられない「乱倫」の風習である」とある。
- 加賀藩士の場合、実子が家を継ぐ割合は５７．６％、弟・甥などが家を継ぐ場合が７％、養子・婿養子が継ぐ場合が３５％。

『新書・江戸時代２ 身分差別社会の真実』に大石慎三郎氏が次のように書いている。

- 「**商家では息子を後継ぎにすることはあまりなく、娘に後を継がせるのが一般的であった。**この娘に、家の番頭や手代の中から最も有能な者をめあわせ、経営を委ねるのである。もし、婿養子に迎えたこの番頭・手代の働きが悪い場合は離縁させることもあるので、**家の財産権は娘につけて婿養子には渡さないのが普通だった。**
- 商家の息子はたいてい別な職につかせたり、一定の財産を与えて好きな生活をさせることが多かった」

http://www.rui.jp/ruinet.html?i=200&c=400&m=271641　江戸時代の結婚、離婚、養子について　より

佐原の祭礼で紛争

- 明和6年（1769）、当時24歳の忠敬の力量が試される祭りにかかわる騒動が起きる。
- 佐原の中心部は小野川を境に大きく本宿と新宿に分かれ、祭りはそれぞれ年に1回ずつ開かれる。
- 伊能家と永沢家のある本宿の祭礼は各町が所有する趣向を凝らした山車が引き回される。
- ところが明和3年（1766）以来、佐原村は不作続きで、農民も商人も困窮していた。
- 佐原村本宿の村役人3人は話し合い、今年は倹約を心がけ、豪華な山車の飾りものは慎むことに決めた。
- しかし、各町内は飾りものの準備を始め、山車を双方の町が一番に出すと言い出し、収拾のつかない状態で祭りの当日を迎えることになった。
- このまま祭りが始まると大騒動に発展すると判断した村役人たちは、**「今年は山車を出さない」と決定**した。
- 佐原村本宿は、本宿組と浜宿組に分かれていた。名主後見の忠敬は本宿組を、永沢は浜宿組の各町を説得。
- ところが祭礼2日目、**永沢家の浜宿組において禁が破られ、山車が引き回されるという事態が発生**した。
- 本宿組の町民はさっそく忠敬を問い詰め、浜宿組が出したのだからこちらも山車を出すと強硬に主張した。
- 忠敬は、大きな争いになると感じたため、**伊能家は永沢家に抗議し、「義絶」すると宣言**した。
- 義絶という、伊能家の強硬姿勢に驚き、**各町は山車を出すことをようやく取り止めた。**
- 佐原の富と名声を持っていた「両家」の義絶は得策ではないと、**仲介によって、同年に両家は和解**する

伊能忠敬 - Wikipedia　より

河岸一件

- **記録を残すことの重要性を認識する河岸一件が起る。**
- 幕府の収入を増やすため、田沼意次は利根川流域などに公認の河岸問屋を設け、運上金を徴収する政策を実行。
- 明和8年（1771年）11月、佐原村も、河岸運上を吟味するため、名主・組頭・百姓代は出頭を通告された。
- 河岸問屋が公認されると運上金を支払わなければならなくなる。
- そこで名主4人が江戸の勘定奉公所へ行き、「佐原は利根川から十四、五町も離れていて、河岸問屋もないから、運上は免除願いたい」と申し出た。
- しかし、奉公所に全く聞き入れられず、それなら佐原には河岸運送を認めないと言われることとなった。
- 佐原村では再び話し合い、永沢治郎右衛門、伊能茂左衛門、伊能権之丞、忠敬の4人が河岸問屋を引き受けることになったが、数日後、2人の辞退があり、結局、引き受けるのは伊能茂左衛門と忠敬の2人だけになった。
- 翌年、勘定奉公所に提出した願書が怒りを買うことになる。
- 去年の願書では、「利根川から十四、五町離れている」を今年は「二、三町」とし、以前は「河岸問屋がない」としていたところ、今度は「2人は前から問屋を営んでいた」などと書かれていたためである。
- 矛盾を追及された佐原側は、昨年申し上げたことは間違いと言い訳をしたが、最終的に奉公所から「前から問屋をしていた証拠を出すように」と命じられた。
- これを受け、忠敬は数日の猶予を願い出て佐原へ帰り、先祖が書き残した古い記録を奉公所に提出した。
- この記録によって、佐原は昔から河岸運送をしていたことが証明され、忠敬と茂左衛門は公認を受けることができた。運上金の額は話し合いのうえ、2人で一貫五百文と決まった。
- この事件で重要な役割を果たすことになった伊能家の古い記録の多くは、忠敬の三代前の主人である伊能景利がまとめあげたものだった。
- 景利は佐原村や伊能家に関わることを丹念に記録に残しており、その量は本にして100冊以上になっていた。
- 忠敬はこの事件で記録を残すことの重要性を身にしみて認識し、自らもこの事件について『佐原邑河岸一件』としてまとめた。

伊能忠敬 – Wikipedia　より

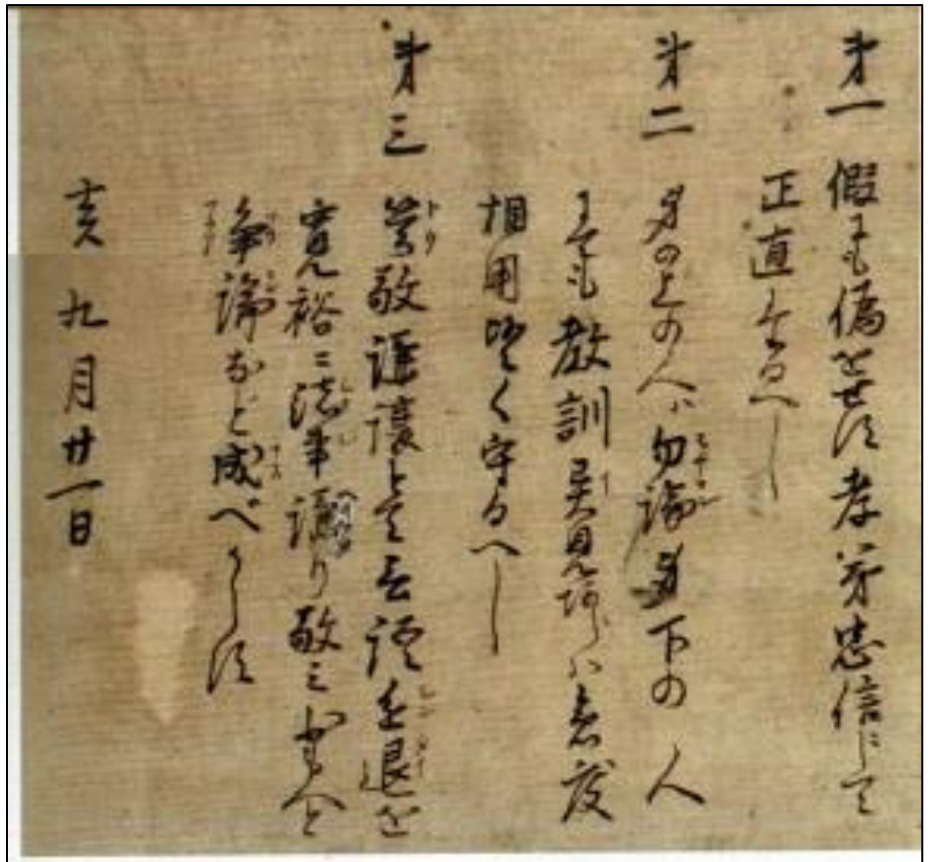
苗字帯刀

- 天明三年、大利根治水の功績により、領主の津田之守から、苗字帯刀を許された。
- 佐原の名主であった伊能忠敬は領内においては代々「伊能」姓を許されていたが、領外でこれを名乗ることが出来ず、56歳の時に天明年間の窮民救済と蝦夷地測量の功績によって江戸幕府勘定奉行から改めて苗字帯刀の許可を得て、佐原以外でも「伊能」姓を名乗ることが許されている。また苗字と帯刀の特権は一体ではなく、苗字は認められても帯刀は認められないことや、苗字は子孫への伝承を許すが、帯刀は授与された当人一代に限った例もあり、功績による種々の基準があった。

伊能忠敬の家訓書

第一　假にも偽をせず孝弟忠信にして
　　正直なるへし
（少しも嘘をつかず、正直にしなさい）
第二　身の上の人ハ勿論身下の人
　　にても教訓異見あらハ急度
　　相用堅く守るへし
（どんな人のいうことでも役にたつことや、正しい意見であったら必ず用いて守りなさい）
第三　篤敬謙譲とて言語進退を
　　寛裕ニ諸事謙（へりくだ）り敬（つつし）ミ少も人と
　　争論など成べからす
（言葉と行動を緩やかにして，万事へりくだって、謹んで、少しの争論もしてはならない）

亥　九月廿一日
（寛政三（一七九一）年　忠敬　四六歳の時）



⬆忠敬直筆の家訓書。三か条に忠敬の人柄が表れている。
縦18.1×横21.1cm。国宝、伊能忠敬記念館蔵

測量の動機

佐原は利根川の洪水による出水の被害を受けやすい土地柄であった。

領主津田氏から命ぜられた堤防修繕普請事業に参画することにより、地図や測量に対する関心が生まれた。

寛政6年（1794）に利根川の実測地図を作成している。

高橋至時から暦学、天文学を深く学ぶにつれ、地球の形、大きさを知りたいと強く思うようになる。それには、子午線一度の長さを測ることが必要になる。

深川の自宅から北の方角にある暦局（天文方役所）までの距離を測量「北極星の高さを２つの地点で観測し、見上げる角度を比較することで緯度の差が分かり、２地点の距離が分かれば地球は球体なので外周が割り出せる」と提案。その結果を報告したが、「短い距離では誤差が大きく、少なくとも、蝦夷地くらいまでの距離を測らなければならない」と一蹴された。

これが、全国測量へ動かしたそもそもの動機となった。

（伊能忠敬　日本列島を測る　前編より）

測量の動機

だが、当時は幕府の許可が無ければ蝦夷地には行けない…。

そこで至時が考えた名目が“地図制作”だった（つまり暦制作が本来の目的で、地図制作は移動の自由を得るための口実だった）。

この頃、蝦夷地では根室にロシア特使が上陸して通商を要求し、ロシア人の択捉島上陸事件も起こっており、国防のために正確な地図が必要だった。

至時・忠敬の師弟はそこを突き、結果的に幕府は蝦夷地のみならず、東日本全体の測量許可を出す（ただし幕府の財政援助はなく、すべて自費。

伊能家の３万両＝約30億円とも言われる資産が役立った）。

子午線一度の距離

寛政13（1801）年、56歳で本州東海岸の測量を行い、子午線一度を「２８．２里」とするが、至時は認めなかった。続いて、東北、中部地方への測量をさらに高精度で行い、「２８．２里」を出すが、至時は、これも認めなかった。

その当時、司天台に南蛮最新の暦学書の、「ラランデ暦書」なるものが入荷した。（中略）

享和3（1803）年、忠敬が58歳の時、「ラランデ暦書」で、子午線一度の値が、「２８．２里」とあるのが判明し、忠敬の値と一致して、師弟ともども、大いに喜んだという。

瀧道真一著　伊能忠敬　より

忠敬が計測した緯度１度分の距離「２８．２里」の誤差は０．２％で、実際の距離と数百メートルの違いしかない極めて正確なものでした。

２８．２里＝110.749Km　　緯度0度＝110.574Km　89度＝111.693Km

伊能忠敬の身長と歩幅について

伊能忠敬記念館元館長の佐久間達夫氏は同館所蔵の「雑録」中に「1町に158歩」という記述があるのを発見され、それを忠敬の歩測データと認めて、歩幅69cmとしています。

これは間接的な「証拠」ですが、忠敬自身が「自分の1歩は〇〇」と具体的に書いたものは発見されていません。なお、井上ひさし氏は『四千万歩の男』のなかで、歩幅を「2歩で1間」としていますが、いくら何でも一歩90cmは大き過ぎると思いますが？

師匠の高橋至時が同僚の間重富（大坂）と交換した書状集「星学手簡」の中の、高橋の書状で「200歩を大図一分に表現した」という記述があります。師匠の言葉ですから、事実だと思いますが、これから逆算すると、忠敬の歩幅は66cmくらいになります。佐久間氏の推測値と3cm違いです。多分66～69cmということかと思います。

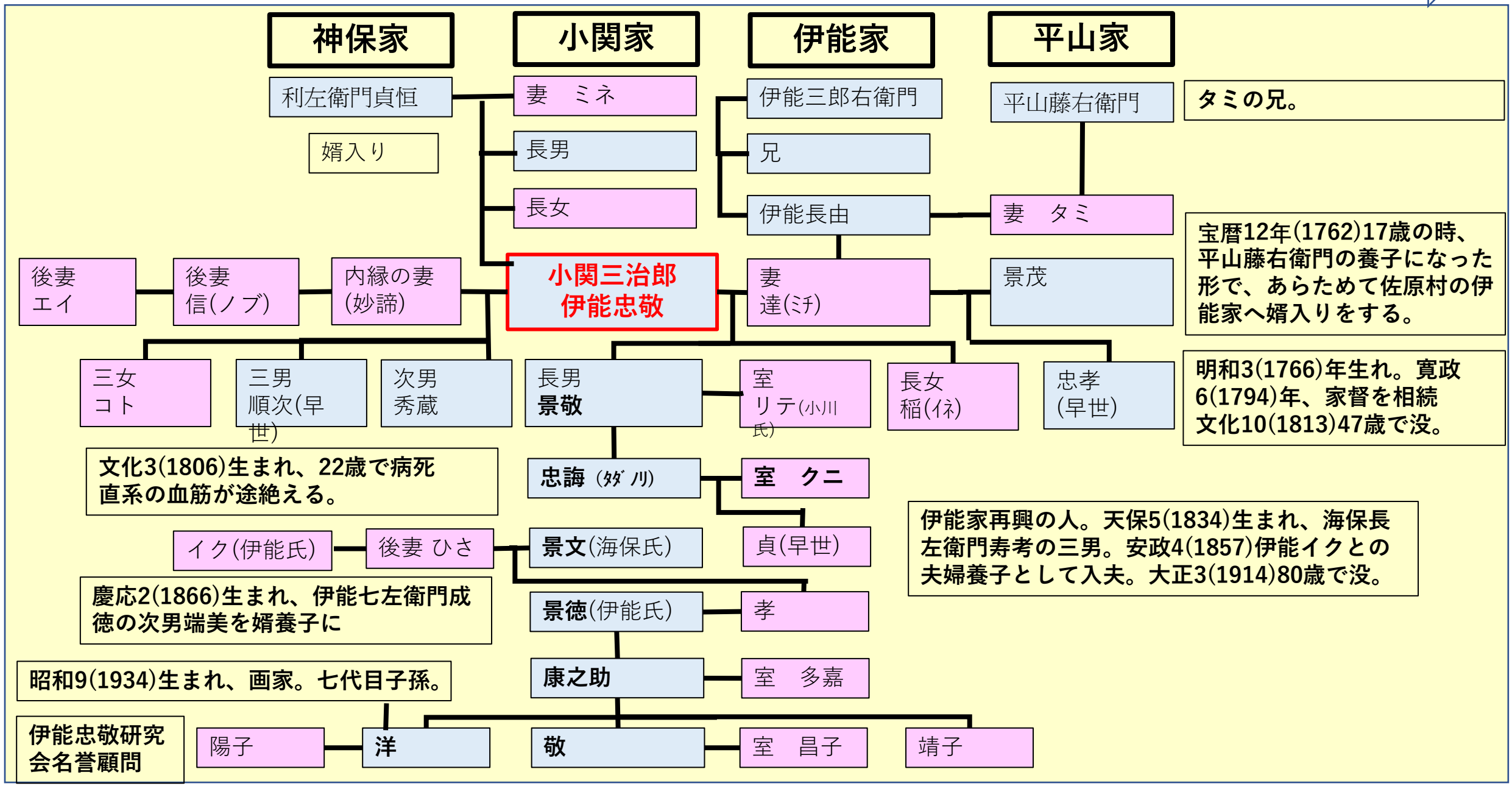
よくある質問 (Q&A) - InopPedia tokyo - (inopedia.tokyo)

忠敬の体格は、着物の丈が135cmであることから、身長は160cm前後、体重は55kg程度と推定されています。

伊能忠敬の年表（2）

和暦	西暦	歳	内容
寛政12年	1800年	56	第1次測量　(蝦夷地・奥州街道)。間宮林蔵と出会う。
享和元年	1801年	57	第2次測量　(伊豆～陸奥の海岸線、奥州街道)
享和2年	1802年	58	第3次測量　(陸奥～越後の海岸線、越後街道)
享和3年	1803年	59	第4次測量　(駿河～尾張、越前～越後の海岸線と街道、佐渡島)
文化元年	1804年	60	高橋至時病死(40歳)、東日本の沿岸地図を作成し、幕府に提出。10人扶持を受ける。
文化2年	1805年	61	第5次測量　(紀伊半島～琵琶湖、淀川沿い～山陽・山陰海岸線、島嶼)、岡山で越年。
文化5年	1808年	64	第6次測量　(四国・淡路島、大和・伊勢街道)、伊勢で越年
文化6年	1809年	65	第7次測量　(中山道・山陽道、九州(小倉・大分で越年)～中国地方の街道、甲州街道)
文化8年	1811年	67	第8次測量　(九州～中国地方の街道、姫路で越年、近畿地方)
文化12年	1815年	71	第9次測量　(江戸府内一次、伊豆諸島、熱海で越年。富士山裾野、箱根)忠敬は参加せず。
文化13年	1816年	72	第10次測量　(江戸府内二次)、『大日本沿海輿地全図』作成着手。
文化15年	1818年	74	4月13日 死去、喪を秘して地図製作を続行。
文政4年	1821年		没後『大日本沿海輿地全図』完成、三ヶ月後喪を公表。
明治16年	1823年		没後贈正四位

伊能忠敬の家系図


神保家
小関家
伊能家
平山家
利左衛門貞恒
妻　ミネ
伊能三郎右衛門
平山藤右衛門
タミの兄。
婿入り
長男
兄
長女
伊能長由
妻　タミ
宝暦12年(1762)17歳の時、平山藤右衛門の養子になった形で、あらためて佐原村の伊能家へ婿入りをする。
後妻 エイ
後妻 信(ノブ)
内縁の妻 (妙諦)
小関三治郎 伊能忠敬
妻 達(ﾐﾁ)
景茂
三女 コト
三男 順次(早世)
次男 秀蔵
長男 景敬
室 リテ(小川氏)
長女 稲(ｲﾈ)
忠孝 (早世)
明和3(1766)年生れ。寛政6(1794)年、家督を相続 文化10(1813)47歳で没。
文化3(1806)生まれ、22歳で病死 直系の血筋が途絶える。
忠誨（ﾀﾀﾞﾉﾘ）
室　クニ
伊能家再興の人。天保5(1834)生まれ、海保長左衛門寿考の三男。安政4(1857)伊能イクとの夫婦養子として入夫。大正3(1914)80歳で没。
イク(伊能氏)
後妻 ひさ
景文(海保氏)
貞(早世)
慶応2(1866)生まれ、伊能七左衛門成徳の次男端美を婿養子に
景徳(伊能氏)
孝
昭和9(1934)生まれ、画家。七代目子孫。
康之助
室　多嘉
伊能忠敬研究会名誉顧問
陽子
洋
敬
室　昌子
靖子